

| | | | | | |
|------|--|-----------------|--|----------|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 看護学概論 | 単位 1単位 | 「看護とはなにか」「看護師とはどのような職業か」について学び、看護を志す初学者としての基本的な考え方を身につける | | |
| 担当講師 | 木村 幸子 看護師臨床経験:10年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 看護とは | 「看護」及び「看護学概論」を学ぶにあたって | 講義 | 基礎分野 |
| | 2 | | 看護とは | 講義 | 心理学 文化社会学 哲学 |
| | 3 | | 看護の本質 | 講義 | |
| | 4 | | 看護の主要概念 人間・環境・健康・看護 看護の役割と機能 | グループワーク | 専門基礎分野 保健医療論 関係法規Ⅰ 関係法規Ⅱ |
| | 5 | 看護の対象の理解 | 看護の対象としての人間 | 講義 演習 | 専門分野 |
| | 6 | | 人間の「暮らし」の理解 健康のとらえ方と国民の健康状態 | | 看護の思考過程 ヘルスアセスメント 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅱ 共通看護技術Ⅲ |
| | 7 | 看護とは | さまざまな看護理論 | 講義 | 経過に応じた基本技術Ⅰ 経過に応じた基本技術Ⅱ 家族看護論 |
| | 8 | 看護の提供者 | 職業としての看護(看護の変遷) 看護の歴史 | 講義 | 基礎統合演習 成人看護学概論 老年看護学概論 小児看護学概論 母性看護学概論 精神看護学概論 在宅看護概論 |
| | 9 | | | | 看護管理・看護倫理 看護の統合と実践 |
| | 10 | 看護の提供のしくみ | サービスとしての看護 看護をめぐる制度と政策 法的な規定と就業状況 看護における倫理 | 講義 演習 | |
| | 11 | 看護における倫理 | 倫理とは | 講義 | |
| | 12 | | 職業倫理としての看護倫理 医療をめぐる倫理の歴史的経緯と看護倫理 | 講義 | |
| | 13 | 看護の提供の仕組み | 医療安全 | 講義 | |
| | 14 | 広がる看護の活動領域 | 国際化と看護 災害時における看護 | 講義 | |
| | 15 | これからの看護 終講試験 | 看護学生に期待すること 筆記試験 | 講義 | |
| 評価方法 | 筆記試験(10割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[1] 看護学概論 医学書院 国民衛生の動向 厚生労働統計協会 看護の基本となるもの 看護協会出版会 看護のための人間発達学 第4版 医学書院 ナイチンゲール看護覚え書 現代社 新訂版 実践に生かす看護理論19 サイオ出版 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|------------------------------|--|---------------------|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 共通看護技術 I | 単位 1単位 | 看護技術の概念について理解し、看護技術の基本となるコミュニケーション技術を身につける | | |
| 担当講師 | 小林 理絵 看護師臨床経験:7年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 30時間 | また、感染予防のための知識・技術とともに、対象の意思決定や主体的な参画を支援する学習支援について学ぶ | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 看護実践のための技術 | 1. 看護技術とは ① 技術とは ② 看護技術と倫理 ③ 看護技術の特徴 ④ 看護技術の範囲 ⑤ 看護技術の構成要素 ⑥ 技術習得に向けて ⑦ 白衣着用時の身だしなみについて | 講義 | 基礎分野 心理学 人間工学 教育学 人間関係論演習 |
| | 2 | 標準予防策 (スタンダードプリコーション) | 感染防止の基礎知識 標準予防策 感染経路別予防策 洗浄・消毒・滅菌 感染性廃棄物の取り扱い カテーテル関連血流感染対策 | 講義 | 専門基礎分野 看護形態機能学 I 看護形態機能学 II 看護形態機能学 III 臨床微生物学 |
| | 3 | | ①スタンダードプリコーションに基づく手洗いの技術 必要な防護用具の選択、着脱の技術 使用した器具の感染防止の取り扱いの技術 ②個人防護用具装着 (手袋、エプロン、ガウン、ゴーグル) ③感染性廃棄物の取り扱い | 演習 | |
| | 4 | 看護者としての関係構築のための コミュニケーション | 2. 関係構築のためのコミュニケーション ① コミュニケーションとは ② コミュニケーションの構成要素 ③ ミスコミュニケーションについて ④ 医療におけるコミュニケーションの特徴 ⑤ 接近的行動とその実際 | 講義 | 専門分野 看護学概論 共通看護技術 II 共通看護技術 III 経過に応じた基本技術 I 経過に応じた基本技術 II |
| | 5 | 対象との関わりを効果的にする コミュニケーション1 | 3. 効果的なコミュニケーション ① マイクロカウンセリング技法:傾聴 ② 情報収集の技術 ③ アサーティブネス ④ プロセスレコードとその振り返り | 講義 | 看護の思考過程 家族看護論 成人看護学概論 老年援助論 II 精神看護学概論 |
| | 6 | 対象との関わりを効果的にする コミュニケーション2 | 4. ベッドサイドでのコミュニケーション 5. コミュニケーション障害への対応 | 演習 | 精神援助論 III 医療安全 |
| | 7 | 多職種連携のための コミュニケーション | 6. 効果的なカンファレンスのあり方 ① カンファレンスとは | 講義 演習 | |
| | 8 | 看護における学習支援 | 学習支援とは 学習支援の実際(家庭/学校/職場/地域) | 講義 | |
| | 9 | | 健康状態に応じた学習支援の実際 (外来/入院時/退院時/個人/家族/集団) | 講義 | |
| | 10 | | 事例に応じた学習支援のロールプレイング | グループワーク ロールプレイング | |
| | 11 | 学習支援ワーク | | | |
| | 12 | 環境調整技術 | 療養生活の環境 病室の環境のアセスメントと調整 | 講義 | |
| | 13 | | 安全な療養環境の整備の技術 ①転倒・転落・外傷予防 ②ベッドメイキング | 演習 | |
| | 14 | 無菌操作の技術 | 無菌操作の技術 ①滅菌物の取り扱い ②無菌操作 ③使用した器具の取り扱い | 演習 | |
| 15 | 終講試験 | | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(7割) レポート(3割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[2] 基礎看護技術 I 医学書院 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術 II 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 学研 ナイチンゲール看護覚え書 現代社 | | | | |

| | | | | | |
|------|---|---------------|--|-----|--|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 共通看護技術Ⅱ | 単位 1単位 | 看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために、活動と休息・睡眠の援助、安楽確保の技術、清潔および衣生活援助技術について学ぶ | | |
| 担当講師 | 池上 真由美 看護師臨床経験:5年以上 教育経験:3年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 活動休息援助技術 | 基本的活動の援助 基本的活動の基礎知識 | 講義 | 基礎分野 心理学 人間工学 教育学 |
| | 2 | | 睡眠・休息の援助 体位・移動 | | |
| | 3 | | 体位変換の技術 体位保持(ポジショニング) | 演習 | |
| | 4 | | 車椅子・ストレッチャーの移乗介助・移送の技術 | 演習 | |
| | 5 | 苦痛の緩和・安楽確保の技術 | 臥床患者のリネン交換の技術 褥瘡法 身体ケアを通じてもたらされる安楽 | 講義 | 専門基礎分野 看護形態機能学Ⅰ 看護形態機能学Ⅱ 看護形態機能学Ⅲ |
| | 6 | | ①体位の保持の技術(ポジショニング) ②褥瘡予防ケアの技術 ③安楽な体位の調整の技術 ④安楽の促進・苦痛の緩和のためのケア ⑤体温調整の技術(褥法) | 演習 | |
| | 7 | 病床での衣生活の援助 | 援助の基礎知識 衣服を用いることの意義 熱産生と熱放散 被覆気候 衣生活に関するニーズのアセスメント 援助の実際 病衣の選び方 病衣・寝衣の交換 寝衣交換の技術・整容の技術 | 講義 | 専門分野 看護学概論 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅲ 経過に応じた基本技術Ⅰ 経過に応じた基本技術Ⅱ 看護の思考過程 家族看護論 成人看護学概論 医療安全 |
| | 8 | 清潔の援助 | 清潔の援助の基礎知識 皮膚・粘膜の構造と機能 清潔援助の効果 患者の状態に応じた援助の決定と留意点 清潔の援助の実際 | 講義 | |
| | 9 | | 入浴とは・シャワー浴とは 全身清拭・寝衣交換 ・点滴・ドレーン等を留置していない患者の寝衣交換 | 演習 | |
| | 10 | | 洗髪とは・口腔ケアとは | 講義 | |
| | 11 | | 洗髪の技術・整容の技術 | 演習 | |
| | 12 | | 部分浴とは・陰部洗浄とは | 講義 | |
| | 13 | | 口腔ケアの技術 | 演習 | |
| | 14 | | 部分浴の技術 陰部洗浄(陰部の保清) | 演習 | |
| 15 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(7割) レポート(3割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 学研 | | | | |

| | | | | | |
|------|---|--------------------|--|-----|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 共通看護技術Ⅲ | 単位 1単位 | 看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために、食事援助技術、排泄の援助技術について学ぶ | | |
| 担当講師 | 山田 緑 看護師臨床経験:10年以上 教育経験:1年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 食事援助の基礎知識 | 食事の意義 食事に必要なメカニズム | 講義 | 基礎分野 人間工学 教育学 文化社会学 |
| | 2 | 栄養の評価 | 栄養状態および食欲、摂食能力のアセスメント | 講義 | |
| | 3 | 食事の援助 | 食事介助の基礎知識、実際 摂食嚥下訓練の基礎知識、実際 | 講義 | 専門基礎分野 |
| | 4 | 食事の援助 | 食事指導・食事介助の技術 | 演習 | 看護形態機能学Ⅰ 看護形態機能学Ⅱ 看護形態機能学Ⅲ |
| | 5 | 非経口的栄養摂取 | 非経口的栄養摂取の援助 経管栄養法 中心静脈栄養法 | 講義 | |
| | 6 | 非経口的栄養摂取 | 経管栄養法 経管栄養法による流動食の注入の技術 経鼻胃チューブの挿入の技術 | 演習 | 専門分野 看護学概論 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅱ 看護の思考過程 成人看護学概論 老年援助論Ⅱ 医療安全 |
| | 7 | 排泄の援助の基礎知識 | 排泄援助に対する基礎知識 排泄の意義とメカニズム | 講義 | |
| | 8 | | 排泄の観察とアセスメント | | |
| | 9 | 自然な排泄を促す援助 | トイレ・ポータブルトイレでの排泄援助方法 床上排泄の援助方法 | 講義 | |
| | 10 | 自然な排泄を促す援助の実際 | 床上排泄援助の実際 排泄援助(床上、ポータブルトイレ、おむつなど)の技術 | 演習 | |
| | 11 | 排泄機能障害がある対象への援助① | おむつによる排泄援助、導尿・浣腸・摘便・ストーマによる排泄援助 | 講義 | |
| | 12 | | 導尿又は膀胱留置カテーテルの挿入の技術 膀胱留置カテーテルの管理の技術 | 演習 | |
| | 13 | 排泄機能障害がある対象への援助② | 浣腸の実施方法 | 講義 | |
| | 14 | 排泄機能障害がある対象への援助の実際 | グリセリン浣腸の技術 | 演習 | |
| 15 | 終講試験 | | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(7割) レポート(3割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学〔2〕 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学〔3〕 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 学研 | | | | |

| | | | | | |
|------|---|----------------------------|---|----------|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | ヘルスアセスメント | 単位 1単位 | 対象の状況を把握するためのヘルスアセスメントを学ぶ | | |
| 担当講師 | 池上 真由美 看護師臨床経験:5年以上 教育経験:3年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 人間を身体的・精神的・社会的に統合された存在として捉え、環境との相互関係の中で、変化しながら生活する存在として理解できる能力を養う | | | | |
| | 3 人々の健康上の課題に応じて、科学的根拠に基づいた看護を展開できる基礎的能力を養う | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | ヘルスアセスメント | ヘルスアセスメントとは ヘルスアセスメントの意義、目的 ヘルスアセスメントに必要な技術 ヘルスアセスメントの実際 全体を概観する・健康歴の聴取 | 講義 演習 | 基礎分野 人間工学 |
| | 2 | 観察・記録・報告 バイタルサインについて | 観察・記録・報告の意味 バイタルサインとは バイタルサインを測定する意義・目的 バイタルサインの変動因子 バイタルサイン測定の実際 (血圧、脈拍、呼吸、体温、意識) | 講義 | 専門基礎分野 看護形態機能学Ⅰ 看護形態機能学Ⅱ 看護形態機能学Ⅲ 病態生理学総論 病態と治療Ⅰ 病態と治療Ⅱ 病態と治療Ⅲ 病態と治療Ⅳ |
| | 3 | 身体計測 | 身体的状態のアセスメント 身体計測 身体のみかた:視診・触診・打診・聴診・問診 | 講義 演習 | |
| | 4 | バイタルサイン測定 | バイタルサイン測定の実際 | 演習 | |
| | 5 | 呼吸器・循環器系の | 呼吸器系のフィジカルアセスメント | 講義・演習 | 専門分野 看護学概論 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅱ 共通看護技術Ⅲ 経過に応じた看護技術Ⅰ 経過に応じた看護技術Ⅱ |
| | 6 | フィジカルアセスメント | 循環器系のフィジカルアセスメント 自覚症状の確認 | | |
| | 7 | 腹部のフィジカルアセスメント | 腹部のフィジカルアセスメントの目的 自覚症状 聴診・視診・打診・触診の実際 | 講義 演習 | |
| | 8 | 技術試験 | バイタルサイン測定技術試験 | | |
| | 9 | 骨格筋系のフィジカルアセスメント | 骨格筋系のフィジカルアセスメントの目的 自覚症状の確認 関節可動域の観察 MMT、ADL | 講義 演習 | 看護の思考過程 基礎統合演習 成人援助論Ⅰ 成人援助論Ⅱ 成人援助論Ⅲ 成人援助論Ⅳ 成人援助論Ⅴ 老年援助論Ⅰ 老年援助論Ⅱ 老年援助論Ⅲ |
| | 10 | 頭部・頸部・感覚器系の フィジカルアセスメント | 意識とは 頭部のフィジカルアセスメント 頸部のフィジカルアセスメント 耳・目・鼻などのフィジカルアセスメント | 講義 | |
| | 11 | 乳房・生殖器の フィジカルアセスメント | 乳房・生殖器のフィジカルアセスメント | 講義 演習 | 老年援助論Ⅰ 老年援助論Ⅱ 老年援助論Ⅲ |
| | 12 | 心理・社会のアセスメント | 事例を用いた心理・社会のアセスメント | 講義 | 医療安全 |
| | 13 | 症状のアセスメント | 事例を用いた身体面のアセスメント | 演習 | 看護の統合と実践 |
| | 14 | | ・基本情報 ・経過表 ・情報収集 ・援助計画の立案 ・個別性のあるバイタルサイン測定、 フィジカルアセスメント | | |
| 15 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(7割)実技試験(1割) レポート(2割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 学研 フィジカルアセスメントガイドブック 医学書院 | | | | |

| | | | | | |
|------|---|----------------|---|-----|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 看護の思考過程 | 単位 1単位 | 看護実践するための看護過程の展開技術を身につける | | |
| 担当講師 | 小林 理絵 看護師臨床経験:7年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 ささまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 看護過程の展開とは | 看護とは 健康とは 看護理論とは 現象を説明するための枠組み 看護過程とは 看護を具体的に実践するための方法論 | 講義 | 基礎分野 心理学 文化社会学 |
| | 2 | 基盤となる考え方 | 問題解決思考 クリティカルシンキング 倫理的配慮と価値判断 リフレクション | 講義 | 専門基礎分野 看護形態機能学Ⅰ 看護形態機能学Ⅱ 看護形態機能学Ⅲ 病態生理学総論 病態と治療Ⅰ 病態と治療Ⅱ 病態と治療Ⅲ 病態と治療Ⅳ 病態と治療Ⅴ |
| | | 具体的な方法 | 情報アセスメント 看護問題の明確化 計画 実施 評価 | 講義 | |
| | 3 | 情報整理とアセスメントの視点 | 情報整理 枠組みの考え方 事例提示 | 演習 | |
| | 4 | 情報アセスメント | 情報アセスメントの実際 | 演習 | 専門分野 看護学概論 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅱ 共通看護技術Ⅲ 基礎統合演習 |
| | 5 | | | | |
| | 6 | 全体像、関連図 | 関連図を用いて全体像を明確にしていく | 演習 | 基礎統合演習 成人援助論Ⅰ 成人援助論Ⅱ 成人援助論Ⅲ 成人援助論Ⅳ 成人援助論Ⅴ 老年援助論Ⅲ 小児援助論Ⅲ 母性援助論Ⅲ 精神援助論Ⅲ |
| | 7 | 看護過程の展開 | 看護過程の展開 看護計画立案 評価 | | |
| | 8 | 実践、評価 | 看護計画の実施 | 演習 | 成人援助論Ⅳ 成人援助論Ⅴ 老年援助論Ⅲ |
| | 9 | | | | 小児援助論Ⅲ 母性援助論Ⅲ 精神援助論Ⅲ |
| | 10 | 看護記録 | シミュレーション演習 | 演習 | 訪問看護の看護過程 看護の統合と実践 |
| | 11 | | 看護計画の実施 | 講義 | |
| | 13 | | | 演習 | |
| | 14 | | 看護記録とは 記録、報告 | | |
| 15 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(5割) レポート(5割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[2] 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 系統看護学講座 別巻 臨床薬理学 医学書院 看護技術プラクティス第4版 学研 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|------------------------------|---|--|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 経過に応じた基本技術 I | 単位 1単位 | 看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために、創傷管理技術、呼吸・循環を整える援助技術、死の看取りの援助について学ぶ | | |
| 担当講師 | 堀之内 泉 看護師臨床経験:10年以上 教育経験:3年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | |
| | | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 創傷管理技術 | 創傷管理の基礎知識 | 講義 | 基礎分野 |
| | 2 | | (創傷処置/ドレッシング材管理/包帯法) | | |
| | 3 | | 褥瘡予防の基礎知識 (褥瘡発生要因/判定スケール/褥瘡予防ケア) 創傷処置(創洗浄、創保護、包帯法)の技術 | 演習 | |
| | 4 | 呼吸・循環を整える援助技術 | 酸素吸入療法/酸素ポンベの取扱い | 講義 | 専門基礎分野 |
| | 5 | | 排痰ケアの基礎知識 | | |
| | 6 | | 排痰ケアの実際 | | |
| | 7 | | (体位ドレナージ/スクイーピング/咳嗽介助 ハフィング/口腔・鼻腔内吸引) | | |
| | 8 | | 持続吸引(胸腔ドレナージ) | | |
| | 9 | | 吸入療法の基礎知識と援助の実際 | | |
| | 10 | | 人工呼吸療法 | | |
| | 11 | 体温管理の技術 | | | |
| | 12 | 症状・生体機能管理技術 | 末梢循環促進ケア | 講義 | 病態と治療 I 病態と治療 II 病態と治療 III 病態と治療 IV 病態と治療 V 病態と治療 VI |
| | 13 | | 症状・生体機能管理技術の基礎知識 | | |
| | 14 | 検体検査 | 血液検査 | 講義 | 専門分野 |
| 15 | 尿検査 | | | | |
| 16 | 便検査 | | | | |
| 17 | 喀痰検査 | 生体情報のモニタリング | 講義 | 看護学概論 共通看護技術 I 共通看護技術 II 共通看護技術 III 成人援助論 I 成人援助論 II 成人援助論 III 成人援助論 IV 成人援助論 V 老年援助論 II 老年援助論 III 医療安全 看護の統合と実践 | |
| 18 | | 心電図検査 | | | |
| 19 | | 心電図モニター | | | |
| 20 | 呼吸循環を整える技術 | SpO ² モニター | 演習 | | |
| 21 | | 血管留置カテーテルモニター | | | |
| 22 | 死の看取りの援助 | 吸引・吸入の技術 | 演習 | | |
| 23 | | 酸素吸入療法の実施(酸素ポンベの取り扱い) | | | |
| 24 | | ネブライザーを用いた気道内加湿 口腔内・鼻腔内吸引 | | | |
| 25 | 死の看取りの援助 | 死にゆく人と周囲の人々へのケア | 演習 | | |
| 26 | | 死後の処置の在り方 | | | |
| 27 | | 死後の処置 | | | |
| 28 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(7割) レポート(3割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術 II 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 | | | | |

| | | | | | | |
|------|--|---|--|---------------|---|--|
| 教育内容 | 専門分野 I 基礎看護学 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | | |
| 授業科目 | 基礎統合演習 | 単位 1単位 | 看護の思考過程およびヘルスアセスメント、共通看護技術 I～III、経過に応じた基本技術 I・II で修得した看護基本技術を統合させ、患者の状態に応じた看護ができる能力を身につける また、記録・報告の技術を身につける | | | |
| 担当講師 | 小林 理絵 看護師臨床経験:7年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 30時間 | | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | | |
| | 6 看護実践を振り返り新しい知見を得て、人々の健康と豊かな生活に寄与することができる | | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 | |
| | 1 5 | 看護過程の展開 | 看護過程の展開 看護計画立案 評価 | 講義 グループワーク | 基礎分野 人間関係論演習 | |
| | 6 7 | 実践・評価 | 看護計画の実施 | 演習 | | |
| | 8 | | シミュレーション演習 点滴ドレーン等を留置している患者の寝衣交換 精神的安寧を保つためのケア 安楽の促進・苦痛の緩和のためのケア | 演習 | 専門分野 | |
| | 9 14 | | 看護計画の実施 | 講義 演習 | | |
| | 15 | 看護記録 | 看護記録とは 記録、報告 | | 専門分野 看護学概論 共通看護技術 I 共通看護技術 II 共通看護技術 III ヘルスアセスメント 看護の思考過程 経過に応じた看護技術 I 経過に応じた看護技術 II 訪問看護の看護過程 成人援助論 I 成人援助論 II 成人援助論 III 成人援助論 IV 成人援助論 V 老年援助論 III 小児援助論 III 母性援助論 III 精神援助論 III 看護の統合と実践 | |
| | 評価方法 | レポート(5割) 発表(5割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| | テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[2] 基礎看護技術 I 医学書院 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術 II 医学書院 系統看護学講座 別巻 臨床薬理学 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 学研 | | | | |

| | | | | | |
|------|---|----------------|--|----------|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 経過に応じた基本技術Ⅱ | 単位 1単位 | 看護援助技術を対象の状態に合わせて適切に実施する能力を身につけるために この診察・検査・処置における技術を学ぶ | | |
| 担当講師 | 足立 唯 看護師臨床経験:7年以上 教育経験:2年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | |
| | 7 看護師としての生き方を模索し、キャリア形成の礎を築くための教養を身につけることができる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 診察・検査・処置における技術 | 診察の介助 検査・処置の介助 X線撮影・コンピューター断層撮影:磁気共鳴画像 内視鏡検査・超音波検査・肺機能検査 核医学検査・穿刺 | 講義 | 基礎分野 |
| | 2 | | 静脈内採血の目的 静脈内採血時の医師の役割 採血時に起こりうる事故と回避方法 | 演習 | 専門基礎分野 看護形態機能学Ⅰ 看護形態機能学Ⅱ 看護形態機能学Ⅲ |
| | 3 | | 静脈内採血の実際 | | |
| | 4 | | 検体の取り扱い 検査の介助 | | 疾病治療論 病態と治療Ⅰ 病態と治療Ⅱ 病態と治療Ⅲ 病態と治療Ⅳ 病態と治療Ⅴ 病態と治療Ⅵ |
| | 5 | 薬物療法について | 薬物療法の意義と看護師の役割 | 講義 | 臨床薬理学 |
| | 6 | | 薬物療法の意義と目的 薬に関連した法令 薬物の種類 薬物の種類吸収・分布・代謝・排泄 薬理作用とその影響、副作用 経路別与薬方法と実際: | | |
| | 7 | 経口与薬について | 経口与薬法,口腔内与薬法,直著内与薬法 | 講義 | 専門分野 |
| | 8 | | 経皮的与薬法(経口薬(バツカル錠・舌下錠・内服薬)) | 演習 | 看護学概論 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅱ 共通看護技術Ⅲ |
| | 9 | 与薬法について | 吸入法,単純塗擦法,点眼・点鼻・点耳法, | 講義 | 成人援助論Ⅰ |
| | 10 | 注射法について | 注射法とは:適応,メリット・デメリット,吸収速度の違い 注射の種類と目的・方法,合併症:皮内注射,皮下注射 筋肉内注射,静脈内注射,輸液療法 | 講義 | 成人援助論Ⅱ 成人援助論Ⅲ 成人援助論Ⅳ 成人援助論Ⅴ |
| | 11 | | | | 老年援助論Ⅱ 老年援助論Ⅲ |
| | 12 | 輸液管理 | 輸液療法を受けている対象の看護 看護師の役割と法的役割 輸血法と輸血の管理 | 講義 演習 | 医療安全 看護の統合と実践 |
| | 13 | | 皮下注射・筋肉内注射・輸液療法の実際(プライミング) | 講義 | |
| | 14 | | 点滴静脈内注射の管理 静脈路確保・点滴静脈内注射の技術 患者の誤認防止策の実施 針刺し事故後の防止・事故後の対応 インシデント・アクシデント発生時の速やかな報告 | 講義 | |
| 15 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(7割) レポート(3割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[3] 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 看護技術プラクティス 第4版 学研 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|-------------|--|----------|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 家族看護論 | 単位 1単位 | 急性期医療、慢性期医療、エンドオブライフケア、遺族ケアなどさまざまな領域で家族看護のニーズの重要性が増している。家族全体を視野に入れた看護の必要性について学ぶ。 | | |
| 担当講師 | 泊 祐子 教育経験:10年以上 実務経験:4年以上 | 時間数 15時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 家族看護とは | 家族看護の成立と発展過程 家族看護の目的 | 講義 | 基礎分野 心理学 文化社会学 |
| | 2 | 家族看護の対象理解① | 家族とは 社会の発展と家族の変貌 家族の形態の変化 | 講義 | 専門基礎分野 |
| | 3 | 家族看護を支える理論① | 家族の誕生と消滅 家族の発達段階と課題 | 講義 | 専門分野 I |
| | 4 | 家族看護を支える理論② | 家族役割と生活 家族役割理論 育児と介護 家族構造と機能 病気がもたらす生活の変化 家族ストレス理論 | 講義 | 看護学概論 看護研究 看護の思考過程 ヘルスアセスメント |
| | 5 | 家族看護過程 | 家族アセスメントと介入理論 家族システムズアプローチ | 講義 | 共通看護技術 I 共通看護技術 II 共通看護技術 III 基礎統合演習 |
| | 6 | 家族看護の実践① | 事例に基づく家族看護実践 高齢者と家族 医療的ケア児を育てている家族 | 講義 演習 | 経過に応じた基本技術 I |
| | 7 | 家族看護の実践② | | | 経過に応じた基本技術 II |
| | 8 | 終講試験 | 筆記試験 | | 地域・在宅看護論 訪問看護と看取り 地域と看護 成人看護学概論 精神援助論 III 老年看護学概論 小児看護学概論 母性看護学概論 精神看護学概論 看護の統合と実践 |
| 評価方法 | 筆記試験(7割) レポート(3割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 別巻 家族看護学 医学書院 | | | | |

| | | | | | |
|------|---|---|--|----------|---|
| 教育内容 | 専門分野 基礎看護学 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 看護研究 | 単位 1単位 | 看護研究に必要な基礎的知識を身につけ、研究に取り組むことができる | | |
| 担当講師 | 富澤 理恵 臨床経験:3年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| | 2 ささまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 7 看護師としての生き方を模索し、キャリア形成の礎を築くための教養を身につけることができる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 始めようー看護研究 | 研究プロトコール、研究デザイン | 講義 | 基礎分野 論理学Ⅰ 論理学Ⅱ 情報科学 情報倫理 |
| | 2 | | 研究の倫理 *記事に関する考察 | | |
| | 3 | | 看護研究の紹介 質的研究、量的研究 | 講義 | |
| | 4 | 研究テーマを考える | 文献検索、論文抄読 クリティーク 研究進行の発表 文献レビューの発表 | 講義 演習 | 専門基礎分野 |
| | 5 | ケーススタディーを始めよう | ケーススタディーについて | 講義 演習 | 専門分野 看護学概論 成人看護学概論 成人援助論Ⅰ 成人援助論Ⅱ 成人援助論Ⅲ 成人援助論Ⅳ 成人援助論Ⅴ 老年看護学概論 老年援助論Ⅰ 老年援助論Ⅱ 老年援助論Ⅲ 医療安全 |
| | 11 | | 事例研究論文の抄読、クリティーク ケーススタディー骨組み作成 ケーススタディーレポート作成 ケーススタディーをデザインする ケーススタディーを発表する ポスターまたはPC発表 | | |
| | 12 | | ケーススタディー作成 | | |
| | 13 | | | 演習 | |
| | 14 | ケーススタディー発表 | | 発表 | |
| | 15 | | | | |
| | 評価方法 | レポート(5割)、発表(5割) 但し、受験資格は履修規定、第9条によるものとする | | | |
| | テキスト | 系統看護学講座 別巻 看護研究 医学書院 | | | |

| | | | | | | |
|------|--|--|---|---------------|--|--|
| 教育内容 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 時期 1年次 | 科目のねらい | | | |
| 授業科目 | 地域と看護 | 単位 1単位 | 看護の対象を生活者としてとらえるためには人の暮らしの場であり、生活背景である地域を知る必要がある。そのために地域での様々な取り組みに参加し、人々の暮らしと地域のつながりを理解する | | | |
| 担当講師 | 西山 玲子 臨床経験:10年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 30時間 | | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 | |
| | 1 2 | 暮らしとは | 子育て、学ぶ、働く、病を治す、 老いとともに生きる、最後を迎えるなど、 発達段階やライフサイクル、ライフイベントなど 人々の多様な暮らしを学ぶ ※インタビュー (自分以外の2世代の人にする。) (日々の暮らしについて大変なこと、必要なこと、 気を付けていること、希望することなど) | インタビュー 視聴覚 | 基礎分野 文化社会学 専門基礎分野 | |
| | 3 4 | 暮らしと健康状態 | 自分自身の生活の仕方と健康状態の関連 生活と健康との関連について | グループワーク 発表 | 専門分野 看護学概論 家族看護論 地域・在宅看護概論 訪問看護の看護過程 | |
| | 5 6 | 地域について | 地域とは、コミュニティとは 地域包括ケアシステム 地域の特性を査定する指標 地域の特性と人々の生活習慣 健康状態との関連を査定する指標 | | | |
| | 7 8 | 地域と看護 | 自分自身の居住地域の特性について調べる ・居住地域の安全、安心、健康に暮らすための コミュニティ活動について情報収集 ・活動のひとつを選び実際に参加するための 企画書を作成する | | | |
| | 9 10 11 12 | | 活動へ参加 ・地域の人へのインタビュー (住みやすさ、希望など) | 課外活動 | | |
| | 13 14 15 | | 地域活動参加したものをまとめる ・暮らしと地域について | 発表 | | |
| | 評価方法 | 筆記試験(6割) レポート(4割) | | | | |
| | テキスト | 系統看護学講座 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤 医学書院 系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践 医学書院 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|-------------|--|-----|---|
| 教育内容 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 地域・在宅看護概論 | 単位 1単位 | 在宅療養者と家族の特徴と人々の暮らしを支援するための法律や制度、在宅療養する対象の特徴について学ぶ | | |
| 担当講師 | 西山 玲子 臨床経験:10年以上 教育経験:10年以上 | 時間数 15時間 | | | |
| 教育目標 | 1 人々との良好な人間関係を築き、信頼関係と協働的な関係を形成することで自己決定を支援することができる | | | | |
| | 2 ささまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | |
| | | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 在宅看護とは | 社会の変化と在宅看護のニーズ | 講義 | 基礎分野 文化社会学 |
| | 2 | | 医療介護総合確保推進法と地域包括ケアシステム 地域の医療ニーズと医療連携 居住地域の地域包括ケアシステムの調査 居住地域のケアマップ作成 地域包括支援センターの役割と機能 在宅看護における看護師の役割と機能 | | |
| | 3 | 多職種との連携と協働 | 多職種・多機関 医療機関との連携、入退院時連携 地域ケアチームの連携と協働 | 講義 | 専門基礎分野 リハビリテーション療法 社会福祉Ⅰ 社会福祉Ⅱ 関係法規Ⅰ 関係法規Ⅱ |
| | 4 | 社会資源の活用1 | フォーマルサービス・インフォーマルサービス 介護保険法 介護保険制度(介護認定、介護給付、予防給付) | 講義 | 専門分野 看護学概論 家族看護論 地域と看護 訪問看護技術 訪問看護の看護過程 老年看護学概論 老年援助論Ⅱ |
| | 5 | 社会資源の活用2 | 介護保険以外の関連する法律 医療保険制度、公費負担医療、難病法 障がい者総合支援法 | | |
| | 6 | 訪問看護制度 | 訪問看護制度 医療保険と介護保険の使い分け | | |
| | 7 | 在宅療養者と家族 | 訪問看護の対象者の特徴 医療ニーズのある対象、小児の対象 認知症の対象、精神疾患の対象 在宅における家族看護 家族の発達課題、家族機能、家族アセスメント 介護力アセスメント、ジェノグラム、エコマップ | | |
| | 8 | 終講試験 | 筆記試験 | | |
| 評価方法 | 筆記試験(6割) レポート(4割) | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤 医学書院 系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践 医学書院 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|-----------------|---|----------|--|
| 教育内容 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 訪問看護技術 | 単位 1単位 | 在宅療養を可能にする訪問看護技術を学ぶ | | |
| 担当講師 | 大澤 増子 臨床経験:10年以上 | 時間数 30時間 | | | |
| 教育目標 | 2 ささまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 6 看護実践を振り返り新しい知見を得て、人々の健康と豊かな生活に寄与することができる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 呼吸を守る看護技術 | 非侵襲的陽圧換気療法(NPPV) | 講義 | 基礎分野 人間工学 |
| | 2 | | NPPVマスクの特徴・種類とフィッティング(業者) | 演習 | |
| | 3 | | HOT機器の特徴と取り扱い(業者) 呼吸リハビリテーション(セラピスト) 排痰方法 スクイーミング、カフアシスト(NSまたはセラピスト) | | |
| | 4 | 栄養を確保する看護技術 | 在宅中心静脈栄養法(HPN)管理とポート挿入 | 講義 | 専門基礎分野 看護形態機能学Ⅰ 看護形態機能学Ⅱ 看護形態機能学Ⅲ 病態と治療Ⅰ 病態と治療Ⅱ 病態と治療Ⅲ 病態と治療Ⅳ 病態と治療Ⅴ |
| | 5 | | 在宅での胃瘻の管理と接続方法 | 演習 | |
| | 6 | 排泄を妨げない看護技術 | 浣腸、摘便、陰部洗浄 | 講義 | |
| | 7 | | 在宅でのストーマ管理とフランジ交換 | 演習 | |
| | 8 | | | | |
| | 9 | 在宅療養を可能にする創傷処置 | 在宅での褥瘡ケア | 講義 | 専門分野 共通看護技術Ⅰ 共通看護技術Ⅱ 共通看護技術Ⅲ 経過に応じた看護技術Ⅰ 経過に応じた看護技術Ⅱ 訪問看護と看取り 訪問看護の看護過程 ケアマネジメント演習 老年援助論Ⅱ 医療安全 |
| | 10 | | 洗浄とドレッシング材の選択 | 演習 | |
| | 11 | 廃用予防のためのポジショニング | 布団、ベッドでの平行移動、座位、リフト移乗 関節拘縮を防ぐポジショニング | 講義 演習 | |
| | 12 | 在宅での清潔ケアの看護技術 | 簡易洗髪器、バスタオルとビニールで作るケリーパッドを使用した洗髪 | 演習 | |
| | 13 | | | | |
| | 14 | | 温タオルを使用した清拭 | | |
| 15 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(6割) レポート(4割) | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤 医学書院 系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践 医学書院 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|-------------------------|--|----------------|---|
| 教育内容 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 訪問看護と看取り | 単位 1単位 | 老いや病いを抱えながら在宅で暮らす人を支える看護を学ぶ | | |
| 担当講師 | 藤原 真由美 臨床経験:10年以上 | 時間数 15時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 看取りとは | 終末期ケア、ターミナルケア、エンドオブライフケア、 看取りケアの考え方 在宅ホスピス、ホームホスピス、デイホスピス、 看護小規模多機能居宅介護、介護医療院 | 講義 | 基礎分野 心理学 文化社会学 教育学 |
| | 2 | 看取りにおける倫理と日本人の 死の捉え方 | 安楽死、尊厳死 人間観、身体観、死生観、パターンリズム、 家族中心主義、儀礼的意味 | 講義 | 専門基礎分野 |
| | 3 | 看取りにおける権利と 意思決定支援 | インフォームドコンセント、アドバンスケアプランニング 事前指示書、DNAR | 講義 | 臨床薬理学 |
| | 4 | 在宅の看取りにおける チームアプローチ | 在宅ケアチーム、在宅移行支援、看護連携、 訪問診療、多職種連携とサービス、 デスカンファレンス | 講義 | 専門分野 |
| | 5 | 看取りの時期にある人の 特徴とケア | トータルペイン(全人的苦痛)とアセスメント、 死の受容過程とアセスメント、疼痛緩和ケア、 WHO除痛ラダー、がん疼痛の薬物療法に 関するガイドライン 倦怠感の症状アセスメント、臨死期の特徴的な症状 在宅サービスと療養環境整備、医療器材の整備 本人・家族の医療機器管理と医療処置 | 講義 講義 演習 | 看護学概論 経過に応じた看護技術Ⅱ 家族看護論 地域・在宅看護論 訪問看護技術 訪問看護の看護過程 成人看護学概論 老年看護学概論 小児看護学概論 |
| | 6 | 在宅の看取りケア | 看取りをする家族、家族のセルフケア能力、 介護力、家族関係、死の準備教育、グリーフケア | | |
| | 7 | 在宅における看取りの看護技術 | オピオイド鎮痛薬、麻薬の取り扱い、PCAポンプ 経皮的オピオイド、NSIDS座薬の取り扱い エンゼルケア | | |
| 8 | 終講試験 | 筆記試験 | | | |
| 評価方法 | 筆記試験(6割) レポート(4割) | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤 医学書院 系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践 医学書院 | | | | |

| | | | | | |
|------|--|--|---|-----|---|
| 教育内容 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | 訪問看護の看護過程 | 単位 1単位 | 療養者と家族が地域で生活を継続していくための課題やニーズに応える看護過程を学ぶ | | |
| 担当講師 | 小西 純子 臨床経験:5年以上 | 時間数 15時間 | | | |
| 教育目標 | 1 人々との良好な人間関係を築き、信頼関係と協働的な関係を形成することで自己決定を支援することができる | | | | |
| | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 4 生命の尊厳と人権を守り、人々の多様な価値観や生活背景・信条を持つ人に尊重した行動がとれる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | 事例を用いた訪問看護の実際 | 在宅看護過程の構成要素 情報収集・アセスメント 訪問看護計画 | 講義 | 基礎分野 |
| | 2 5 7 | | 【事例】 パーキンソン病の療養者の生活支援・社会資源の活用と訪問計画、援助の実際 認知症療養者の生活支援・社会資源の活用と訪問計画、援助の実際 | 演習 | 専門基礎分野 関係法規Ⅰ 関係法規Ⅱ 社会福祉Ⅰ 社会福祉Ⅱ |
| | 8 | 終講試験 | 筆記試験 | | 専門分野 看護学概論 家族看護論 看護の思考過程 地域・在宅看護論 訪問看護技術 地域と看護 ケアマネジメント演習 成人看護学概論 成人援助論Ⅲ |
| | 評価方法 | 筆記試験(5割) レポート(5割) | | | |
| | テキスト | 系統看護学講座 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤 医学書院 系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践 医学書院 | | | |

| | | | | | |
|------|--|------------------|--|-----|--|
| 教育内容 | 専門分野 地域・在宅看護論 | 時期 2年次 | 科目のねらい | | |
| 授業科目 | ケアマネジメント演習 | 単位 1単位 | 療養者と家族が希望する生活を支援するためのケアマネジメントを学ぶ | | |
| 担当講師 | 小西 純子 臨床経験:5年以上 | 時間数 15時間 | | | |
| 教育目標 | 2 さまざまな場に暮らすあらゆる健康状況にある人々に対して、倫理的判断と科学的根拠に基づいた看護が実践できる | | | | |
| | 3 人々を変化する環境の中で、身体的・精神的・社会的に統合された生活者として理解できる | | | | |
| | 5 人々の健康と豊かな生活を守る使命を自覚し、多職種と連携協調することによって支援することができる | | | | |
| | 6 看護実践を振り返り新しい知見を得て、人々の健康と豊かな生活に寄与することができる | | | | |
| 学習内容 | 回 | 項目 | 内容 | 教授法 | 関連科目 |
| | 1 | ケアマネジメント | ケアマネジメントの概念、対象者の自立支援とQOLの向上、自己決定支援 ケアマネジメントの構成要素 ケアマネジメントの機能 ケアマネジメントの過程、アセスメント、ケアプラン サービス担当者会議、モニタリング評価 | 講義 | 基礎分野 専門基礎分野 社会福祉Ⅰ 社会福祉Ⅱ |
| | 2 | 生活支援のための社会資源の活用 | フォーマル・インフォーマルサービス、介護給付、予防給付の活用の実際、障害者福祉、生活保護、福祉一般 | 講義 | |
| | 3 | 介護保険による居宅介護支援の活用 | 居宅介護支援事業所、介護支援専門員の機能と役割、介護福祉士の機能と役割 | 講義 | 専門分野 |
| | 4 | ケアプランと実践 | ケアプランの実践に必要な多職種と多機関 多職種・多機関との連携と協働 | 講義 | 家族看護論 地域・在宅看護論 地域と看護 成人看護学概論 老年看護学概論 |
| | 5 | ケアプラン演習 | 事例を用いてケアプランを立案する | 演習 | |
| | 6 | | | | |
| | 7 | | | | |
| | 8 | 終講試験 | 筆記試験 | | |
| 評価方法 | 筆記試験(6割) レポート(4割) | | | | |
| テキスト | 系統看護学講座 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基盤 医学書院 系統看護学講座 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践 医学書院 | | | | |